

引用をうける「と」 ——「竹取物語」の用例から——

鶴田 洋子

1. はじめに

日本語における助詞「と」にはいくつかの用法がある。話者の言葉を引用して述べる引用節をうける(1)のような用法もそのひとつである。

(1) ひつじかいはおおかみがきたと言った。

寺村(1978)によれば引用節を受ける「と」を補語としてとる動詞には二種類あるという。即ち発話の動詞(言う、語るなど)と思考の動詞(思う、考えるなど)である。ところが、寺村も指摘しているように「と」は実際にはその二種類ではない動詞にかかっている場合がしばしばある。(注1)

日本語教育において、引用の「と」を提示する場合には発話の動詞と思考の動詞とともになされるのが一般的で、例えば(「発話内容」+と+動詞)のように示される。文型シラバスの代表的な教科書であり、多くの日本語学習者に使用されている「日本語初歩」(国際交流基金)15課「えいごで何と言いますか」は次のような文で始められている。

「先生、おはようございます。」

「やあ、おはよう。」

学生は先生に何と言いましたか。

学生は先生に「おはようございます。」と言いました。(「日本語初歩」p121)

更に「文のかた」としていくつかの用例が挙げてある。

(2) 先生に「おはようございます」と言いました。

学習者にとっては習得すべき基本的な文型として(2)のような用例は欠かせないものであろう。しかし、「文のかた」に示されている用例のうち(3) a (4) a (5) aなどは、少々不自然なものが感じられる。文脈によって変わる場合もあるとしても、bのように言うのが一般的ではないだろうか。

(3) a 犬はワンワンといてなきます。

b 犬はワンワンとなきます

(4) a「お元気ですか」と言って、あいさつをしました。

b「お元気ですか」とあいさつをしました。

(5) a「すみませんが、トイレはどこですか」と言って、たずねました。

b「すみませんが、トイレはどこですか」とたずねました。

なぜbの方が自然に感じられるのか。おなじ「日本語初歩」15課の用例でも、次のような例は必ずしも「と言って」がないほうが自然だとは言えないようである。

(6) a「また会いましょう」と言って別れました。

b「また会いましょう」と別れました。

(7) a「しつれいします」と言って、いすにかけました。

b「しつれいします」といすにかけました。

どうしてこのような違いが出て来るのか、疑問である。初級の学習項目では「と」を受ける動詞は発話思考の動詞（「言う」「答える」「たずねる」「聞く」「頼む」「話す」「思う」「考える」）でありこの文法事項を習得するのが『日本語初歩』15課の目的になっているが、日本語に於ける引用形式は単純にかたづけることが出来ないものがあるようだ。

「と」は発話思考の類の動詞にかかるだけなのか、発話思考の動詞が必要になる場合と必ずしも必要ではない場合をどのような考えればいいのかという疑問を改めて持たざるを得ない。この問題については様々な視点から取り上げられているが、ここでは「と」を日本語史の観点から考察してみることにする。まず「竹取物語」の用例から、平安時代の日本語ではどのような引用形式が使われていたか見ていきたい。

II. 「直接引用」をうける「と」

「竹取物語」は「ものがたりのいではじめのおやなるたけとりのおきな」（源氏物語「絵合わせ」）とあるように、物語の祖とされている。本来は漢文であったかとも言われるが、それは作者が源順という男性であることと関係があるらしい。音読されたということも考えられ、語りの枠を守っているという。（注2）ここで「竹取物語」を選んだのは物語の中で会話がどのように取り込まれているのか、平安時代の日本語の用例として調べてみたいと考えたからである。

まず日本古典文学大系「竹取物語」（岩波書店）における直接引用の用例について検討してみることにする。直接引用とは発話者が言ったことを人称などを変更せずにそのまま内容として引用することである。直接引用か、または話者の視点から捉え直して述べる間

接引用かは、かぎ括弧で示してあるかの如何に関わらず判定が難しいところである。筆者の直接引用と認定した例は186例であった。(発話主体+「発話・思考内容」+と／とて+動詞)を一単位と考え、複文となる場合はその一まとまりを一つの例として数えた。尚「～など言ふ」は「～と言ふ」と同じと考えた。ある人物の話の中に他の人物の言葉が語られている場合は例から外した。

この例を検討すると、次の1・2・3の三つに整理して分類することが出来ると考えられる。

1. 「と」で内容を受けるもの

(1) 「発話・思考内容」と A

(2) B 「発話・思考内容」と A

2. 「とて」で内容を受けるもの

(1) 「発話・思考内容」とて A

(2) B 「発話・思考内容」とて A

3. 「と」も「とて」も使用しないもの

(1) B 「発話・思考内容」

これらについて検討してみることにする。

1.1 「発話・思考内容」と A

(8) 翁「うれしくものたまふ物かな」と言ふ。

(日本古典文学大系「竹取物語」以下略 p32)

(9) かぐや姫「石つくりの皇子には、佛の御石の鉢といふ物あり。それを取りてたまへ」と言ふ。(p33)

(10) 「翁の命、今日明日とも知らぬを、かくのたまふ君達にもよく思ひ定めて仕ふまつれ」と申すもことはり也。(p33)

(11) 「あな、かひなのわざや」との給ひけるよりぞ、思ふにたがふ事をば、かひなしとは言ひける (p52)

(12) これを、使ふ者ども「なを物思す事あるべし」とさ、やけど (p59)

「と」を受ける動詞は次の様にまとめられる。

①	②	③
言ふ 41	おぼす 5	うなづく 1
のたまふ 17	おもふ 2	泣く 1
申す 5	おもひめぐらす 1	うく 1
問ふ 5		傾く 1
告ぐ 2		ねたむ 1
答ふ 1		もたぐ 1
仰す 1		はらだつ 1
聞かす 1		おがむ 1
承る 1		こころもとながる 1
そしりあう 1		
ののしる 1		
ささやく 1		
77	8	9

①は発話に関する動詞②は思考に関する動詞③は発話に伴う動作や心の状態を表す動詞と言ってもよいと思う。①が典型的な例で数の上では多数だが③もあることを確認しておきたい。

1.2 B 「発話・思考内容」と A

- (13) 翁皇子に申すやう「いかなる所にか、この木はさぶらひけん。あやしく、うるはしく、めでたき物にも」と申す。(p37)
- (14) かぐや姫、翁にいはく、「この皮衣は、火に焼かんに、焼けずはこそ、まことならめと思ひて人の言ふことにも負けめ。世になき物なれば、それをまことと疑ひなく思はん、とのたまふ。猶これを焼きて心みん」と言ふ。(p44)
- (15) 中納言、くらつまろにのたまはく「燕は、いかなる時にか子を産むと知りて、人をばあぐべき」との給ふ。(p51)
- (16) 翁いらふるやう「なし給ひ。官冠も、わが子見たてまつらでは、何にかはせむ。さはありとも、などか宮仕へをしたまはざらむ。死に給ふべきやうやあるべき」と言ふ。(p55)
- (17) ある人奏す「駿河の國にあるなる山なん、この都も近く、天も近く侍る」と奏す(p67)

この類はつぎの形式をあげることが出来る。

- ①～いはく「 」と言ふ 7
- ②～申すやう「 」と申す 7
- ③～言ふやう「 」と言ふ 4
- ④～のたまはく「 」とのたまふ 3
- ⑤～申すよう「 」と奏す 3
- ⑥～こたふるやう「 」とこたふ 2
- ⑦～のたまはく「 」と言ふ 2
- ⑧～奏す「 」と奏す 2
- ⑨～いらふるやう「 」と言ふ 1
- ⑩～申さく「 」と申す 1
- ⑪～こたふるやう「 」とのたまふ 1
- ⑫～いふやう「 」とはらだちおる 1
- ⑬～いはく「 」とわらふ 1
- ⑭～もうす「 」となく 1
- ⑮～問ひ給ふ「 」と問ふ 1

同じ動詞が発言内容をはさんでいて「と」で結ばれている場合と、違う動詞によって内容がはさまれていて「と」でつながれている場合がある。Bが言い切りの形であっても、このような形式の場合、例の中に入れた。いずれにしても、ここで使用されているBの述語は発話を表すものである。Aの動詞は発話の動詞のほか発話が行われた動作や心の状態を表す動詞がつながる。

この型のもう一つの特徴は発言内容が長いということである。（「A」と言ふ）と（いはく「B」と言ふ）の「A」と「B」の長さを比べてみると、「B」のほうが長いと言える。「B」の場合には文例の（14）のように長いものもあり、言表する内容が長い場合にはこの形式がとられると思われる。

峰岸明によればこの文引用形式は瞬時に喪失する音声言語の短所を補うという点で有効であったという。（注3）重複表現によって聞き手に印象を強く与え直すと言ってもいいのであろうか。口承性ということを考えると発話内容が長い時にこの引用形式が用いられる傾向があるのもうなづける。

この形式における漢文訓読体と和文の混合ということはなお考えなければならないことであるが、そもそも和文に「申さく…申す」のような引用形式があつて、漢文を「曰（いはく）…者（といへり）」「曰く…いふ」と読むようになった、というのは興味深い。

平安初期に使われたこのような引用形式は院政期には「イフ」などが読まれなくなっていくという。(注4)

2.1 「発話・思考内容」とて A

(18) をろかなる人は、「ようなきありきは、よしなかりけり」とて、来ず成りにけり
(p.30)

(19) 御門「などかさあらん。猶いておはしまさん」とて、御輿を寄せ給ふに (p.57)

(20) 「文を書きをきてまからん。恋しからむをりをり、とり出でて見給へ」とて、うち泣きて書く言葉は (p.64)

(21) かぐや姫「もの知らぬことなの給ひそ」とて、いみじく静かに、公に御文たてまつり給ふ。(p.65)

(22) 「なにせむにか命もおしからむ。たが為にか。何事も用もなし」とて、薬も食はず
(p.66)

「とて」をうける動詞は次の通りである。

ふし拝む 来 入れる 参る2 こぼつ ゐる 寄せる 泣きののしる 出る 暇申す
泣く 寄る 奉る たまふ くふ 書く

「とて」で受けるほうが「と」で受けるより例は少ない。受ける動詞に「言う」「申す」などが無いことに注目したい。「と」が受けていた動詞群とは異なり、発話に関する動詞、思考に関する動詞は「暇申す」ぐらいなのである。言表した内容を受けているわけだから、言うがなくても発話していると理解できるということだろうか。「と」が受けていた「言ふ」「のたまふ」などのように同一の動詞が何度も使用されるのではなく、動作を表す動詞が後続するようである。

この「とて」は「助詞総覧」(「研究資料日本文法助辞編」明治書院)によると、「とて」は「と言って」であり、格助詞「と」に接続助詞「て」がついて一語となったものであることが通説である、とある。そして、接続助詞は用言につくことから「と」は格助詞ではなく指定の助動詞であるという説、更に「と」は指示する副詞でありそこに接続助詞「て」が複合化したものが助詞化したという説を紹介している。

2.2 B 「発話・思考内容」とて A

(23) 翁いふやう「われあさごと夕ごとに見る竹の中におはするにて、知りぬ。子となり給ふべき人なめり」とて、手にうち入れて家へ持ちて来ぬ。(p.29)

(24) 大納言起きぬてのたまはく、「汝ら、よくもて来ずなりぬ。龍は鳴る神のるいにこそありけれ。それが玉を取らむとて、そこらの人々の害せられなむとしけり。まして龍を捕へたらましかば、又、こともなく、我は害せられなまし。よく捕へずなり

にけり。かぐや姫てう大盗人の奴が、人を殺さんとするなりけり。家のあたりだに、いまはとをらじ。男ども、なありきそ」とて、家に少し残りたりける物どもは、龍の玉を取らぬ者どもにたびつ。(p.49)

(25) かの寮の官人、くらつまろと申す翁申すやう「子安貝とらんと思しめさば、たばかり申さん」とて、御前にまいりたれば (p50)

(26) 中納言の給ふやう「いとよき事也」とて、あなないをこぼし、人皆帰りまうで来ぬ (p51)

(27) 翁答えていはく、「天下の事は、とありとも、かかりとも、み命の危さこそ、大きな障りなれば、猶仕うまつるまじき事を、まいりて申さん」とて、まいりて (p56)

この形式として次のような例を見ることが出来る。

- ①～いふやう「 」とて (いれ)
- ②～のたまはく「 」とて (たびつ)
- ③～のたまふやう「 」とて (こぼし)
- ④～いはく「 」とて、「 」
- ⑤～もうすやう「 」とて (まいり)

「とて」を受ける動詞は前項で見たように発話や思考の動詞ではない。「 」の前の B は「いふ、のたまふ、申す」などの発話を表す述語のみである。「とて」に「言ふ」という動詞が内包されているとみれば、1.2に近い形式だと言えるだろう。1.2でみたようにこの形式も発話内容が非常に長い場合に使われ(文例24)、やはり口承性ということが関与していると思われる。

3. B「発話・思考内容」

(28) かぐや姫の言ふやう、「親の給ふことを、ひたぶるに辭び申さん事のいとをしさに、取りがたき物を」 (p37)

(29) かぐや姫の、皮衣を見ていはく「うるはしき皮なめり。別きてまことの皮ならむとも知らず」 (p43)

(30) 翁の有様申して、奏しつる事ども申すをきこしめして、の給ふ「一目見たまひし御心にだに忘れ給わぬに、明暮見なれたるかぐや姫をやりては、いか、思ふべき」 (p61)

(31) 屋の上にをる人々にいはく、「つゆも、物空にかけらば、ふと射殺し給へ」 (p61)

(32) これを聞きてかぐや姫は、「さし籠めて、守り戦ふべきしたくみをしたりとも、あの国の人を、え戦はぬ也。弓矢して射られじ。かくさし籠めてありとも、かの国の

人來なば、皆開きなむとす。あひ戦はんとすとも、かの国の人來なば、猛き心つかふ人も、よもあらじ」(p62)

「と」も「とて」も使用をしない引用形式である。前に述べたように院政時代になると「いはく……いふ」という形式の「いふ」が省略されるということだが(注4)、省略されればまさにこの形式になるわけである。引用内容の後に「と」が残るようにも思われるが、「と」がある例は一つもなかった。物語の口承性ということからなくなったのか、ほかの例も当たって考える必要がある。現代語ではこのよう(発話主体+発話の動詞+「内容」)という語順はほとんど使用されないといってよいだろう。この時代には使用されていたということを漢文の影響の反映と見るべきなのであろうか。

III. 「と」、「とて」、「と言って」

いままで見てきたように、平安時代初期の物語において発話思考の内容を受けるのは「と」と「とて」である。引用を受けるこの二つの助詞は機能は同じではないと思われる。次にどこがどの様に違うのか考えてみたい。

(「～」+と)は動詞にかかる連用修飾語であり、(「引用内容」+「と」)も動詞を修飾すると解することが出来る。先にみたように(引用内容+「と」)は多くの場合発話・思考の動詞にかかっていく。(「引用内容+「と」)+言ふ)で終止する場合もあり、言ひて、言へば、言へども、等のような句末の形をもって後続句へつながっていく場合もある。それに対して(「引用内容」+「とて」)は次の動詞に直接かかっていく。「言ひて」が“省略されている”とか、“はしょられている”とかといって済ませてしまうのは適切ではないように思う。『助詞総覧』『岩波古語辞典』の「とて」の項目を引くとこのような引用内容を受ける「とて」は「と言って」と記載されているが「とて」と「と言って」と置き換えることが出来るのかどうか、違うとすればどう違うのか考えてみたいと思う。

(33) 「をのがなさぬ子なれば、心にも従はずなんある」と言ひて、月日すぐす。(p31)

(34) 「うれしき人どもなり」と言ひて、禄いと多くとらせ給ふ。(p41)

(35) 匠らいみじく喜び「思ひつるやうにもあるかな」と言ひて帰る道にて(p41)

(36) 「それ、さも言われたり」と言ひて、大臣に「かくなん申す」と言ふ。(p44)

(37) かぐや姫なくな言ふ、「さきさきも申さむと思ひしかども、かならず心惑いし給はん物ぞと思ひて、いま、で過ぎし侍りつるなり(略)」と言ひて、いみじく泣くを(p.59)

「と言ひて」は「と言って、それから～」例(36)(37)、「と言いながら～」例(33)(35)「と言って、そして～」(34)と解することが出来ると思われる。「言ひて」は「言ふ」という動詞の連用形であるわけだから言うまでもなく具体的な行為とは「言ふ」である。この「言ふ」行為とは音声言語なのか文字言語なのかは問題があるところで、(38)のような「言ふ」はどちらに解すべきなのであろうか。

(38) ありつる歌の返し「まことかと聞きて見れば言のはを飾れる玉の枝にぞありける」と言ひて、玉の枝も返しつ (p.40)

音声言語であると断定は出来ないようである。なお「言う」については稿を改めて考えてみたい。

「とて」の場合どうだろうか。「発話内容」と後続の動詞を結ぶのであるから、発話に係する動詞を含むと考えられるのだが、それは何も「言ふ」行為に限らないのではないか。

次の例を再掲して考えてみたい。

(39) 「我あさごと夕ごとに見る竹の中におはするにて、知りぬ。子となり給ふべき人なめり」とて、手にうち入れ家へ持ちて来ぬ。(p.29)

(40) 大納言起きいてのたまはく「汝ら、よく持て来ずなりぬ。龍は鳴る神のるいにこそありけれ。それが玉を取らむとて、そこらの人々の害せらなむとしけり。まして龍を捕へたらましかば、又、こともなく、我は害せられなまし。よく捕へずなりにけり。かぐや姫てふ大盗人の奴が人を殺さんとするなりけり。家のあたりだに、いまはとをらじ。男ども、なありきそ」とて、家に少し残りたりける物どもは、龍の玉を取らぬ者どもにたびつ。(p.49)

(41) かの寮の官人、くらつまろと申す翁申すやう「子安貝とらんとしめさば、たばかり申さん」とて、御前にまいりたれば (p.50)

「と言って」は「言う」だが、「とて」の場合は「つぶやく」(例39)「叫ぶ」(例40)、「思う」(例39)などもあてはまるかもしれない。動詞をはっきり特定せず、つまり言うのか叫ぶのかつぶやくのかは関心が向けられず、次にかかる動詞、「(手にうち入れ家へ)持ちて来ぬ」「(龍の玉を取らぬ者どもに)賜びつ」に焦点が当てられているのではないのだろうか。言表内容の前に発話を表す述語がある場合は(例41)よりいっそう「とて」は次の動詞とつなぐ役目をしているに過ぎないと思われる。

(「発話思考内容」+「と」)が発話や思考の動詞にかからず、発話に伴う動作や心の状態を表す動詞にかかる場合があることを前に述べた。このように見ていくと、「と」は副詞から転じたもので、指示の意のある「そ」や「さ」と同根であるとする説もうなづける

のである。「と」の他の用法との関連も考える必要があるだろう。

IV. 間接引用

誰かの発言をそのまま引用するものを直接引用と呼び、引用者の視点から捉え直して引用するものを間接引用と呼ぶ。(注5)

竹取物語は「物語」であり、一人の人間が語るように話が進行して行くわけであるが、その語りの中に登場人物の語りが挿入されている場合がある。劇中劇と言う言い方に倣えば、「物語中物語」とでもいうべきであろうか。くらもちの皇子が作り話を語る場所であるが、そこに登場する人物の言葉がそのまま語られている。

(42) 「山の名を何とか申す」と問ふ。(p.38)

(43) 「これは蓬萊の山なり」と答ふ。(同)

(44) この女、「かくのたまうは誰ぞ」と問ふ。(同)

(45) 女答へていはく「わが名はうかんるり」と言ひて、ふと山の中に入りぬ。(同)

「これ」「わが名」など指示代名詞や人称代名詞など、話者の視点から変更が加えられていないことから、直接引用ということになる。話者は登場人物になり代わって、その視点で状況を語り、その状況の中で登場する人物に更に成り代わって、その人物の視点で語るという、二重の直接引用ということである。

間接引用もなされている。間接引用の例として、終わりの部分の次の文を挙げることが出来る。

(46) 勅使には、つきのいはかさといふ人を召して、駿河の國にあなる山の頂にもてつくべきよし仰せ給ふ。(p.67)

(47) 御文、不死の薬の壺をならべて、火をつけて燃やすべきよし仰せ給ふ。(同)

命令文がそのまま挿入できず(「～よし」仰せ給ふ)としているところは間接引用であることをしめしている。登場人物に直接引用で語らせているのは物語の臨場感を出すためであり、物語の最後に間接引用で語っているのはカメラをひいて行くような効果を出し、終わりに導いていくためと言っても良いであろうか。

V. おわりに

現代語では「とて」は使われなくてもよいだろう。「とて」は消滅したのか、あるいは「と」に合一してしまったのだろうか。又、言表内容の前に発話思考を表す述語が

来る語順は定着しなかったといえるだろう。もう少し、時代を下り、竹取物語にみられるような引用の形式が時代と共にどの様に変化して言ったのか確かめてみたい。

注1 寺村秀夫「日本語の文法」(下)には次のように述べられている。

「文+と」という補語をとる動詞は基本的には一定の類のものではあるけれども、実際にはそれがはしょられて、普通の、本来ならそういう補語をとらない動詞にかかって行くこともしばしばある。(中略)

引用節を補語としてとる動詞は大きく分けて二つある。

I. 発話の動詞

言う、語る、叫ぶ、話す、告げる、教える、訊く、質問する、答える、命じる、頼む、

II. 思考の動詞

思う、考える、信じる、決心する、感じる、気が付く、疑う、勘違いする

(日本語教育指導参考書5『日本語の文法(下)』(1987)国立国語研究所)

注2 「竹取物語」の文章が漢字混じりの平仮名文である事情として、漢字漢文では口承的な叙述の細部まで表現できないこと、当時の物語が音読されることを前提として作成されたことが挙げられている。(峰岸明「物語の文体」講座日本語学8『文体史II』明治書院)

注3 同上p23「いふやう…といふ」など、会話(また、思惟)文引用形式における重要表現なども、漢文訓読における同様の訓読法との関わりについてももちろん考慮しなければならないが、瞬時に消失する音声言語の短所を補うという点で語りにおいて有効なものであったことも認める必要があるように思う。

注4 平安初期の「唯…ノミ」「曰ク…トイフ」「恐ラクハ…ムカト」「願ハクハ…ムト」における傍線の語が、院政期には読み変えられないのが普通である。(小林芳規「字訓の変遷」漢字講座3『漢字と日本語』明治書院)

注5 直接話法、間接話法という用語も使われているが、ここでは使用しない。

参考文献

日本古典文学全集『竹取物語』小学館

川端善明「引用—上代語の場合」(1958)『万葉』28

三上章『現代語法序説』(1953)くろしお出版

三上章『日本語の構文』(1963)くろしお出版

寺村秀夫『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』(1984)くろしお出版

藤田保幸「引用文」論の視界『日本語学』7巻九号(1988)明治書院

砂川有里子「引用文における場の二重性について」『日本語学』7巻九号(1988)明治書院

藤田保幸「文中引用句『と』による『引用』を整理する—引用論の前提として」『論集日本語研究』

(1) 現代編(1986)明治書院

砂川有里子「引用と話法」『講座日本語と日本語教育4巻・日本語の文法・文体(上)』(1989)明治書院

益岡隆志田窪行則『基礎日本語文法』(1992)くろしお出版

1996年7月1日受理